

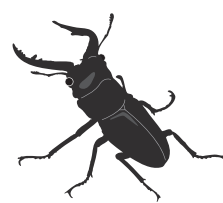
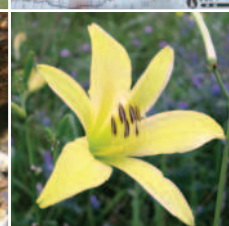
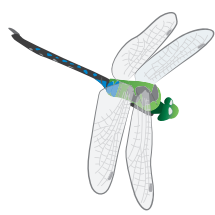
第4回 安曇野市



生きものの調査 2023

～市内の生きものをみんなで調べよう～

《調査結果報告書》



2024年3月
安曇野市





第4回 安曇野市



生きものの調査 2023

～市内の生きものをみんなで調べよう～

《調査結果報告書》



目次

1.安曇野市生きものの調査とは	1
2.調査の様子	4
3.調査結果の概要	7
4.調査結果からみえてきたこと	9

【資料編】

・種ごとの調査結果	21
・調査時配布資料	85
・自然観察会結果概要	97
・調査協力者	105



1 安曇野市生きもの調査とは

生きもの調査の目的

自然豊かな安曇野市内には、6,850種以上の生きものが生息・生育しています。

市では、市民の皆さんのご協力のもと、市内の生きものの変化を調べるとともに、身近な生きものへの理解を深めていただくことを目的として、2007年から5年おきに「生きもの調査」を実施しています。

今回は第4回目の調査として、「水辺」「里地」「里山」に生息・生育する66種を対象に、市内における分布状況などを調べました。

調査について

調査期間中に市内で見つけた生きものについて、メール・FAX・郵送・ながの電子申請・担当窓口への持参により、市民のみなさんからご報告いただきました。

なお、見つけた場所を調べるための「調査マップ」、対象となる66種の特徴を示した「対象種の説明資料」、見つけた時期や場所や発見時の状況などを報告するための「記録用紙」を市ホームページや環境課の窓口で配布しました。

また、情報が少ない種や地域については、市内在住で動植物に詳しい方にご協力いただき、追加調査を実施しました。

本冊子では、それらすべての情報をとりまとめ、報告します。

調査の流れ

① 記録用紙や対象種の説明資料を入手



② 確認した生きものを記録



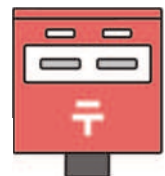
【記録した内容】

- ・生きもの名前
- ・見つけた年月日/時期
- ・見つけた場所
- ・確認状況
- ・写真や標本の有無

③ 調査で見つけた種を市に報告



メール



郵便



ながの
電子申請

調査期間：2023年3月21日～10月31日

調査対象の生きもの

第4回調査では、以下の66種を対象に調査を行いました。

なお、今回は、過年度から継続して対象種とした56種に加え、環境の変化などを踏まえて新たに10種を選定しました。

- ① 水辺の生きもの：26種
- ② 里地の生きもの：24種
- ③ 里山の生きもの：16種

調査対象 ① 水辺の生きもの

26種

市内には、北アルプスから流れる清流や、平野部の湧水、水田につながる水路など、豊かな水辺がみられます。このような水辺は多くの水生生物のすみかとなっています。

水の豊かさやきれいさを指標する生きものや、水辺の環境に影響を与える生きものなど26種を対象としました。

対象とした生きもの(例)



農薬の少ない水田に生育します。「安曇野」の名前が付いた植物ですが、数が減っています。



チョウのような飛び方をする美しいトンボです。分布の変化が注目されています。



水田の減少で、数を減らしていると考えられます。また、近縁種との交雑も進んでいます。



身近な生き物ですが、水辺の環境に対して大きな影響を与えていることが分かってきました。

対象とした生きものの一覧

植物	ミクリ類	
	バイカモ	
	セリ	
	カワチシャ	
	オオカワチシャ	
魚類	カワラニガナ	
	アズミノヘラオモダカ	
	カジカ	
	ドジョウ	
	シマドジョウ	
	ホトケドジョウ	
	水生生物	カワナ
		コモチカワツボ
		サワガニ
		ホウネンエビ
アメリカザリガニ		
昆虫類	タイコウチ	
	ギンヤンマ	
	チョウトンボ	
	ゲンジボタル	
鳥類	ヘイケボタル	
	カワセミ	
	オオヨシキリ	
両生類	ウシガエル	
	トノサマガエル	
	トウキョウダルマガエル	

赤字：安曇野市版または長野県版レッドデータブックに掲載されている生きもの

青字：外来種、あるいは外来種と考えられる生きもの

■レッドデータブックとは...
絶滅の恐れがある生きものの種類やその原因などをまとめた本のこと。

調査対象 **2** 里地の生きもの

24種

安曇野の人里には、住宅地だけでなく水田や畑が広がっています。里地には身近な生きものが多くいる一方で、人間の生活の変化によって、その様子に変化もみられます。

里地でよくみられる生きものや、人間の生活の変化によって影響を受ける生きものなど 24 種を対象としました。

対象とした生きもの(例)



ヒバリ

河原の草地や畑でみられます。春から夏にかけて空高く飛びながら鳴き続けます。



外来

オオハンゴンソウ

近年、市内でもみられるようになりました。広がってしまうことが心配されています。



希少

アマナ

山麓部の草地や水田の畔でみられます。生育に適した場所が減っています。



外来

アライグマ

安曇野市ではまだすみついていないですが、人知れず増える可能性があります。

対象とした生きもの一覧

- 植物
 - シナノタンポポ
 - セイヨウタンポポ
 - アマナ
 - ユウスゲ
 - ワレモコウ
 - ヤブカンゾウ
 - オオハンゴンソウ
 - オオキンケイギク
 - オオブタクサ
 - ナヨクサフジ
 - アレチウリ
- 昆虫類
 - ツマグロヒョウモン
 - アオマツムシ
 - トノサマバッタ
- 鳥類
 - ツバメ
 - イワツバメ
 - ヒバリ
 - カッコウ
 - オナガ
- 爬虫類
 - ニホントカゲ
 - ニホンカナヘビ
- 哺乳類
 - アブラコウモリ
 - アライグマ
 - ハクビシン

調査対象 **3** 里山の生きもの

16種

人里と隣り合った雑木林や植林地のような山は里山と呼ばれます。人とのかかわりが深い生きものや、森の豊かさを指標する生きものなど 16 種を対象としました。

対象とした生きもの(例)



外来

アカボシゴマダラ

近年、目撃例が増えています。在来の蝶との餌を巡る競争が懸念されます。



フクロウ

夜行性のため姿をみることは少ないですが、特徴的な鳴き声で気づきます。

対象とした生きもの一覧

- 植物
 - ウツボグサ
- 昆虫類
 - カブトムシ
 - ヒグラシ
 - ミヤマクワガタ
 - アカボシゴマダラ
 - ヤママユ
 - ナナフシモドキ
- 鳥類
 - ヨタカ
 - フクロウ
 - アオバスク
 - ガビチョウ
- 哺乳類
 - ノウサギ
 - ホンドギツネ
 - ニホンジカ
 - ニホンカモシカ
 - ニホンイノシシ

2 調査の様子

調査内容の周知

第4回調査にあたっては、調査について「広報あづみの」で紹介するとともに、調査の目的や方法のほか、対象種の紹介などを掲載したパンフレットを作成し、市内の全小中学校や支所、交流学习センターなどに配布しました。

また、10月に開催された「安曇野環境フェア2023」にブース出展を行い、中間時点での調査結果を報告するとともに、来場者から対象種についての情報収集を行いました。



パンフレット（表紙）

自然観察会などの開催

生きもの調査への理解を深め、一人でも多く市民に調査に参加していただくために、生きもの調査の「プレ講座」及び、計3回の「自然観察会」を開催しました。

また、「結果報告会」を穂高交流学习センター「みらい」で行いました。

プレ講座（説明会）

プレ講座では、調査や観察方法についての野外実習を交えながら、生きもの調査の趣旨などを解説しました。また、屋内会場では、対象種などの展示を行いました。

当日は、子どもから大人まで計32人の参加があり、身近な生きものについて、楽しく学んでいただきました。また、多くの方に「あづみ野生きもの見つけ隊*」に登録いただきました。

- 開催日時：2023年4月22日（土）10：30～12：30
- 会 場：自然体験交流センター「せせらぎ」（明科）
- 内 容：①生きもの調査の概要及び方法の説明
②野外実習（講師：松田 貴子氏（植物）、斉藤 雄太氏（動物））
③観察した生きもののおさらい、記録の実演



プレ講座の様子



生きものの観察方法を学習



対象種などの展示

*あづみ野生きもの見つけ隊とは…

安曇野市生きもの調査に積極的に参加する市民を募る取り組みのこと（2012年度（第2回）調査より実施）。登録した市民には、隊員証の発行及びノベルティグッズ（缶バッジ）を配付しました。

■自然観察会

自然観察会では、春～秋まで、季節ごとに計3回開催し、生きものの探し方や見分け方などについて市民の皆さんに体験いただきました。

観察会を開催するにあたっては、小学校などに開催チラシを配布したところ、定員を大きく上回る方の申し込みがあり、毎回抽選となりました。

各観察会の概要は、以下のとおりです。



生きもの調査を体験中！

2023年の自然観察会開催状況

回	日時	会場	講師	参加人数
■水辺や里地の生きものを探す				
第1回目	5月27日(土) 10:00~12:30	自然体験交流センター 「せせらぎ」	植物：尾関 雅章氏 動物：東城 幸治氏	30人
	開催の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・「せせらぎ」に隣接する水路や周辺の耕作地にて実施。 ・対象種12種（バイカモ、ヘイケボタル等）のほか、水辺や里地の植物・動物を多数確認。 		
■里山の生きものを探す				
第2回目	7月29日(土) 9:30~12:00	長峰山展望台周辺	植物：森 芳昭氏 動物：中田 伸好氏	35人
	開催の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・長峰山展望台周辺の草原や林縁部にて実施。 ・対象種6種（ユウスゲ、ナナフシモドキ等）のほか、里山の植物・動物を多数確認。 		
■里地・里山の生きものを探す				
第3回目	9月30日(土) 9:30~12:00	穂高牧の農地	植物：浅川 行雄氏 松田 貴子氏 動物：斉藤 雄太氏	29人
	開催の様子	<ul style="list-style-type: none"> ・穂高牧（川窪沢川周辺）の耕作地周辺にて実施。 ・対象種4種（セリ、ツマグロヒョウモン等）のほか、里地・里山の植物・動物を確認。 		



第1回自然観察会の様子



第2回自然観察会の様子



第3回自然観察会の様子

結果報告会

2023年3月21日～10月31日まで実施していた「第4回生きもの調査」の結果について、穂高交流学習センター「みらい」の多目的交流ホールにて、報告会を開催しました。

当日は、調査結果で分かった生きものの分布状況の紹介のほか、生きもの写真家の安田守さんをお招きして、「身近な生き物を調べる・楽しむ」をテーマに記念講演をしていただきました。講演では、安田さんが自宅周辺で行っている生きもの調査の紹介のほか、対象種でもあるナナフシモドキを始めとしたナナフシの仲間や、さまざまなイモムシに関するお話をうかがいました。

当日会場には、子どもから大人まで67人が来場し、生きもののクイズに参加したり、普段見ることができない生きものの貴重な姿の写真を踏まえた安田さんの興味深いお話に真剣に耳を傾けていました。



報告会開催チラシ



第4回調査の結果について報告



生きものクイズを出題中



安田守さんによる記念講演の様子



講演後は質問コーナーもありました

3 調査結果の概要

生きもの調査参加者数及び報告件数

今回の調査では、計 53 人の市民の方から、対象種 61 種 748 件、対象種以外 119 種 173 件の情報が寄せられました（件数には、種が確定しなかったものを含む）。

また、「あづみ野生きもの見つけ隊」には、市民 23 人に登録いただきました。たくさんのご協力、ありがとうございました。

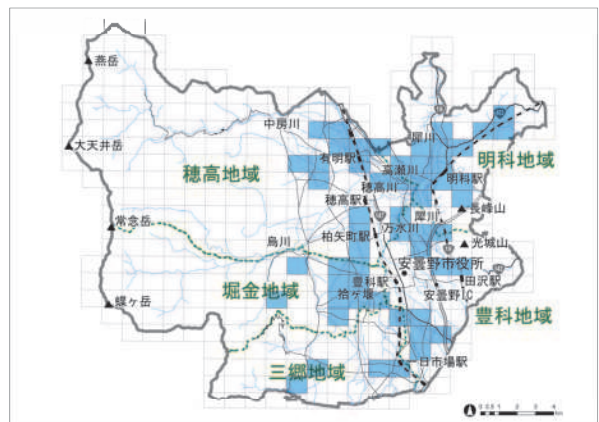
調査結果

調査の結果、対象種 66 種のうち、61 種（748 件）の情報が寄せられました。その内訳は、「水辺の生きもの」が 21 種 141 件、「里地の生きもの」が 24 種 476 件、「里山の生きもの」が 16 種 131 件でした。以下に、結果の概要を示します。

また、今回の調査で新たに分かった生きものの生息・生育状況などについては、「4. 調査結果からみえてきたこと」にまとめました。調査によって明らかとなった対象種の分布状況やその変化など、種ごとの詳しい確認状況は資料編をご確認ください。

水辺の生きものの結果（概要）

- 平野部の広い範囲で確認情報がありました。
- 対象種 26 種のうち、計 4 種（セリ・ギンヤンマ・トノサマガエル・トウキョウダルマガエル）は、市内全ての地域で確認されました。
- オオヨシキリ・ギンヤンマ・トノサマガエル・セリ・サワガニは、10 メッシュ以上で確認されました。
- 今回新たに対象種となった生きものうち、アズミノヘラオモダカ・アメリカザリガニの情報はありませんでした。
- このほか、カワヂシャ・カワラニガナ・ホトケドジョウの 3 種は、前回調査まで情報がありましたが、今回の調査では確認されませんでした。



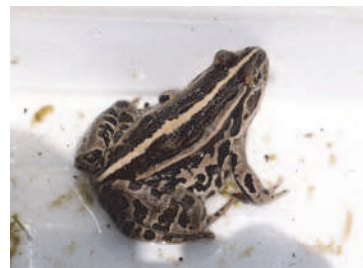
水辺の生きものが確認されたメッシュ



セリ（穂高地域）



サワガニ（明科地域）



トノサマガエル（明科地域）

里地の生きものの結果（概要）

- 平野部のほぼ全域で確認情報がありました。
- 対象種 24 種のうち、特定外来生物であるオオハンゴンソウ・オオキンケイギク・アレチウリを含む計 14 種が全地域で確認されました。
- 特に、ツバメ・セイヨウタンポポ・オオキンケイギクの 3 種は、30 メッシュ以上で確認がありました。
- 第 2 回から対象種となっているアライグマが今回初めて確認され、全ての対象種が市内いずれかの場所で生息・生育していることが明らかとなりました。



里地の生きものが確認されたメッシュ



ツマグロヒョウモン
(穂高地域)



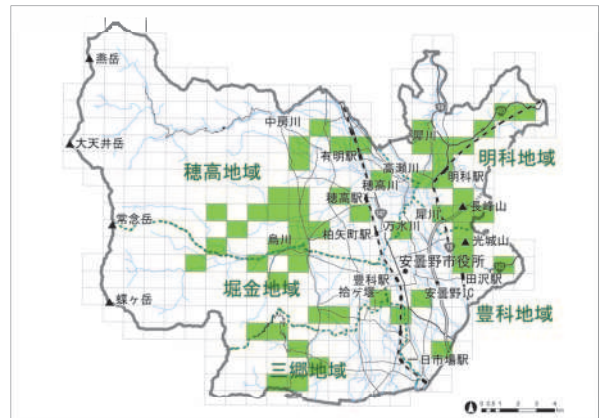
オオキンケイギク
(豊科地域)



ツバメ
(豊科地域)

里山の生きものの結果（概要）

- 山麓部などを中心に、確認情報が寄せられました。
- 対象種 16 種のうち、計 2 種（ウツボグサ・ホンドキツネ）は、市内の全地域で確認されました。
- 新たに対象種となった生きもののうち、ナナフシモドキは特に報告数が多く 11 メッシュで確認されました。



里山の生きものが確認されたメッシュ



ウツボグサ
(明科地域)



ナナフシモドキ
(明科地域)



ホンドキツネ
(穂高地域)

4 調査結果からみえてきたこと

計 4 回の調査により、対象種の中でも、生息・生育状況に変化がない種がいる一方で、確認場所や確認箇所数に変化が生じている種がいることがわかりました。また、今回新たに追加した 10 種についても多くの情報を得ることができました。それらの中から、特徴的な結果についてご紹介します。

新しく調査対象となった種の確認状況

今回新たに追加した対象種は、水辺 4 種（アズミノヘラオモダカ・アメリカザリガニ・チョウトンボ・ウシガエル）、里地 1 種（オオハンゴンソウ）、里山 5 種（アカボシゴマダラ・ヤママユ・ナナフシモドキ・フクロウ・ガビチョウ）です。

追加にあたっては、近年分布の拡大がみられている種のほか、個体数の増加が懸念される外来種など、いくつかの条件に応じて選定しています。それらの特性に沿って調査結果を以下に整理しました。

近年確認が増えた生きもの

以前はほとんど情報がなかったものの、最近市内での確認が増えている生きものとして、ナナフシモドキとチョウトンボを対象種に追加しました。

ナナフシモドキは、2017 年に明科地域の潮沢で大量発生が確認されて以降、三郷地域にも生息域を拡大していることが分かっていたのですが、今回の調査では、豊科地域や穂高地域からも確認の報告がありました。

また、温暖な気候を好む南方系の昆虫であるチョウトンボも近年確認されるようになってきた種で、今回の調査では、明科地域の複数地点から確認情報が寄せられました。

このように、気候変動など、さまざまな環境変化に伴って、今後も市内に生息する生きものが変化していく可能性があります。



ナナフシモドキの確認場所



枝のように見えるナナフシモドキ
(明科地域)

■ 特定外来生物に指定されている生きもの

追加した対象種のうち、アメリカザリガニ、ウシガエル、オオハンゴンソウ、アカボシゴマダラ、ガビチョウの5種が特定外来生物*に指定されています。

今回の調査では、アメリカザリガニを除く4種が確認されており、特にオオハンゴンソウは全地域（計16メッシュ）で情報がありました。豊科・堀金・明科地域では河川や道路沿いなどで報告があるほか、常念岳の登山口に向かう一の沢林道沿いでも確認されており、高標高域への分布拡大が懸念されます。

なお、ウシガエルは三郷・明科地域の池周辺、アカボシゴマダラは穂高・堀金地域の山麓部、ガビチョウは豊科・穂高・明科地域の山林内などで情報があり、今後の動向に注意が必要です。



花の中央部が特徴的なオオハンゴンソウ



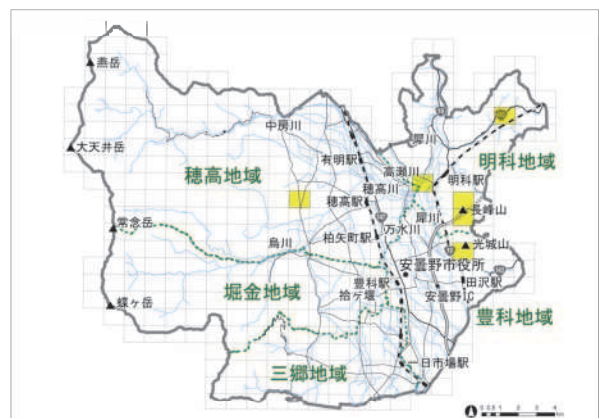
オオハンゴンソウの確認場所



ウシガエルの確認場所



アカボシゴマダラの確認場所



ガビチョウの確認場所

* 特定外来生物とは…

元々は日本以外でのみ生息・生育していたものの、人間活動によって日本に持ち込まれ、生態系や人の生命・身体、農林水産業に大きな影響を及ぼす（またはそのおそれがある）として外来生物法で指定された生きものです。

市に関連する生きもの

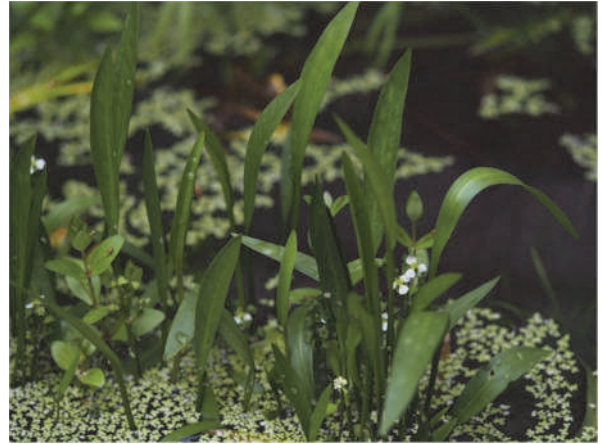
生きものの中には、初めて発見された場所に由来した名前を持つ種がありますが、新規対象種のアズミノヘラオモダカもそのひとつです。1984年に穂高地域で初確認された種で、県内では松本市・小谷村・木曾町の限られた場所でのみ自生が確認されています。

なお、今回調査では確認情報はありませんでした。

現在、国（環境省）及び長野県レッドリスト*の絶滅危惧IB類（近い将来における野生での絶滅の危険性が高いもの）、安曇野市レッドリストの絶滅危惧I類に指定されており、減少が懸念されています。

また、市の伝統産業である天蚕業に関わる生きものとして、ヤママユが新たに対象種となりました。長野県全域で行われていた養蚕業で飼養されていたカイコガとは異なるガ類で、幼虫は薪や炭として利用されていたクヌギの葉を主食としており、里山を主な生息地としている生きものです。今回の調査では、クヌギの林が残る明科地域と穂高地域で生息が確認されています。

これらの生きものを通して、安曇野市本来の環境が保たれているかのひとつの指標として、見守っていくことが大切です。



白い花が可憐なアズミノヘラオモダカ



ヤママユの確認場所



繊維のダイヤモンドともいわれるヤママユの繭

*レッドリストとは…

レッドリストとは、絶滅のおそれのある野生生物の種のリストのこと。日本に生息・生育する野生生物について、生物学的な観点からそれぞれの種の絶滅の危険度が評価され、とりまとめられています。なお、レッドリスト掲載種について、生息・生育状況等を取りまとめて編さんされた冊子のことをレッドデータブックといいます。

生態系の頂点にいる生きもの

豊かな自然には、糞や死体などの有機物を分解する種から、葉・花・実や種子などを好む植物食の種、さらに、昆虫食を含む肉食の種など、さまざまな生きものが生息・生育しており、食物連鎖を繰り返しながら絶妙なバランスで生態系は保たれています。

その生態系ピラミッドの頂点にいるのが肉食の種とされており、日本では主に猛禽類がそれにあたるとされています。このことから、今回の調査では、豊かな生態系が保たれているかの指標として、フクロウを新たに追加しました。

フクロウは夜行性の鳥なので、姿を見ることは難しい生きものですが、鳴き声の特徴的なこともあり、豊科・穂高・明科地域のそれぞれ複数地点で確認情報がありました。

なお、フクロウは大きな木にできるうる（樹洞）を使って繁殖します。樹洞ができるような大きな木がある林は、他の生きものも多く生息・生育する場所ですが、最近はこのような林は少なくなってきており、フクロウの暮らしにも影響が出ている可能性があります。

私たち人間も生態系の一部であり、自然環境から様々な恩恵を受けているからこそ、豊かな暮らしを送ることができます。市内に暮らす生きものの一員として、周囲の環境変化にできるだけ目を向けてみましょう。



フクロウの確認場所



枝にとまって休息しているフクロウ
(穂高地域)



フクロウが利用する大木の樹洞

確認地点数が増加した種

第1回調査開始以降、対象種として調査を行ってきた生きもののうち、今回新たに確認された種や、確認地点数が年を経るにつれて増加している種を紹介します。

生きもの調査では初確認！アライグマの生息情報

北アメリカ原産のアライグマは、生態系や農作物への被害のほか、人獣共通感染症*を媒介するおそれがあることから特定外来生物に指定されています。市内では2002年に明科地域で初めて確認されましたが、その後の市内での生息状況については、よく分からないままでした。そのため、第2回調査（2012年度）から対象種として情報収集を行ってきた結果、今回、生きもの調査としては初めて、豊科地域の2地点（光城山南側及び豊科北中学校付近）から報告がありました。

また、生きもの調査終了後の11～12月には、三郷地域にある民家の柿の木や、堀金地域の社寺林や屋敷林内で、アライグマを目撃・撮影したとの情報が市に寄せられました。

近年、アライグマは池田町や白馬村で捕獲されるなど、市周辺の自治体でも確認されており、中信地域での生息範囲が拡大している可能性があります。

今回の確認情報から、アライグマが市内に定着しているかは、今のところ判明していませんが、今後の生息動向に注視していくとともに、住みやすい環境を増やさないようにしていく必要があります。



アライグマの確認場所



2023年に堀金地域で撮影されたアライグマ
※尻尾が太く縞模様があるのが特徴

*人獣共通感染症とは…

人と脊椎動物が双方に感染する感染症のこと。人畜共通感染症や動物由来感染症、ズーノーシスも同じ意味です。有名なものには、鳥インフルエンザ・狂犬病・日本脳炎・トキソプラズマ症・アニサキス症などがあります。アライグマは、狂犬病やアライグマ回虫症の宿主となっています。なお、狂犬病は、イヌ、キツネ、コウモリなど、さまざまな野生動物が宿主となっていますが、日本では1956年以降発生の確認はありません。また、アライグマ回虫についても、日本で生息する野生個体からは見つかっておらず、人への感染事例は報告されていません。

■ 増加傾向がみられる生きもの

継続的に調査している対象種のうち、植物のヤブカンゾウやナヨクサフジ、昆虫類のツマグロヒョウモン、鳥類のオナガは、確認地点数に増加傾向がみられています。

ヤブカンゾウは、奈良時代以前に中国から持ち込まれたとみられており、食用や薬用として活用されてきました。対象種として調査を開始した第2回調査では、豊科・堀金・三郷地域で確認があり、第3回調査以降は市内全地域で確認されています。

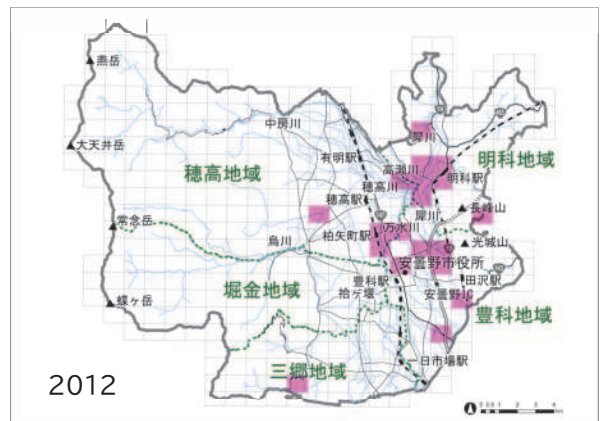
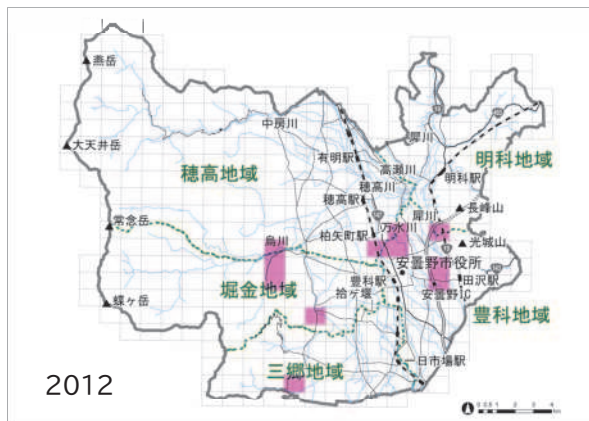
また、ナヨクサフジは、飼料や緑肥用として持ち込まれたヨーロッパ原産のマメ科の植物で、対象種となった第2回調査当初から、市内全地域の特に道路沿いで多く確認されています。



鮮やかなオレンジ色の花が咲くヤブカンゾウ



筒状の紫色の花が特徴的なナヨクサフジ



ヤブカンゾウの変化 (2012と2023の比較)

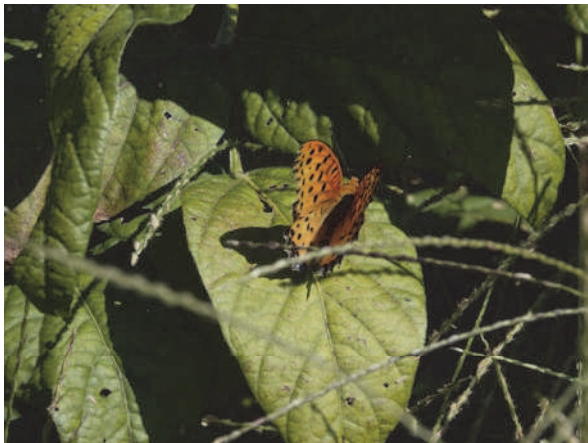


ナヨクサフジの変化 (2012と2023の比較)

第1回調査から対象種として継続調査を行っているツマグロヒョウモンは、主に温暖な地域に生息するチョウとして知られており、調査開始当初は、主に市の中・南部で確認されていましたが、前回調査以降、市の北側でも多く確認されています。

オナガは名前のとおり、長い尾が特徴的なカラス科に属する鳥で、鳴き声も大きく、比較的に見つけやすい生きものです。第2回調査で対象種となり、これまでの調査では、主に穂高・堀金地域で確認されていましたが、今回の調査では、市の南部（三郷地域と豊科地域の境界部）の複数地点から新たに生息の情報が寄せられました。

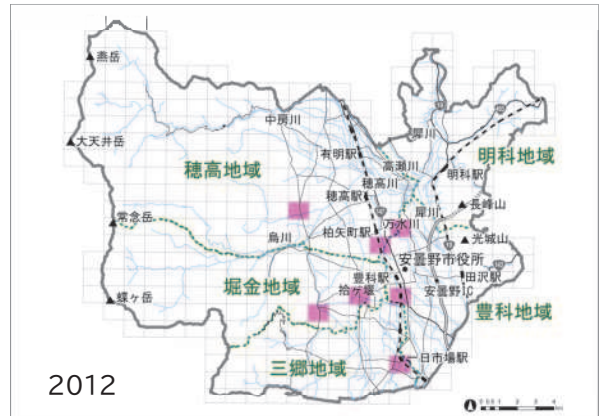
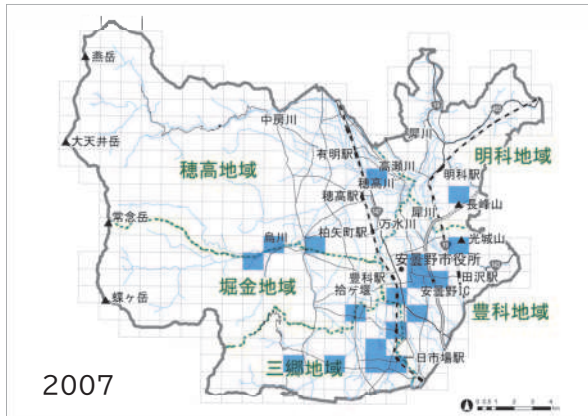
いずれも、今回調査では里地の生きものに区分した種であり、私たちの身近な生きものですので、ぜひ家の周りでも探してみてください。



穂高地域で確認されたツマグロヒョウモン



群れで行動するオナガ



ツマグロヒョウモンの変化 (2007と2023の比較)



オナガの変化 (2012と2023の比較)

確認地点数が減少した種

対象種の中には、過去の調査では情報があったものの、今回の調査では確認がなかった種や、経年的な減少傾向がみられている種もいます。それらを紹介します。

■ 今回の調査では確認報告がなかった生きもの

対象種として継続調査している 56 種のうち、第 2 回調査から調査を行っているカワヂシャ・カワラニガナ・ホトケドジョウは、今回調査での確認情報はありませんでした。

カワヂシャは、水の流れが緩やかな河川や湧水などに生育する在来植物で、第 2・3 回調査では、三川合流部周辺などで確認されていました。市内では、外来種のおオカワヂシャと生育場所が競合していること、さらに、おオカワヂシャと交雑して雑種の「ホナガカワヂシャ」を形成することなどで減少しているとみられます。

カワラニガナは、日当たりの良い河川敷に生育する在来植物で、第 3 回調査で初めて三川合流部付近で確認されています。河原の樹林化によって、生育環境が減少しているとみられます。

また、ホトケドジョウは、湧水が流れるようなきれいな水路などを好む在来の魚類で、第 2・3 回調査では、犀川の河川敷など、市内のごく一部の限られた場所でのみ確認されていました。今回の調査では確認されませんでした。今後も継続的に調査対象としていきたい種です。

いずれも、市だけでなく、国や長野県のレッドリストにも絶滅のおそれがある種として掲載されており、今後の生息・生育状況を注視する必要があります。



白い花が咲くカワヂシャ



河原で小さな黄色い花を咲かせるカワラニガナ



きれいな水に生息するホトケドジョウ

■減少傾向がみられる生きもの

継続的に調査している対象種のうち、植物のオオカワヂシャ、昆虫類のタイコウチやトノサマバッタ、哺乳類のアブラコウモリは、確認地点数に減少傾向がみられています。

オオカワヂシャは、ヨーロッパからアジアの北部を原産とする外来種で、特定外来生物に指定されており、全国的には増加が懸念されています。しかし、安曇野市生きもの調査では、対象種に選定して調査を開始した第2回調査以降、調査回ごとに確認地点数が減少しており、第2回調査の確認メッシュ数は21ありましたが、今回の調査では4メッシュと、約1/5になっています。

オオカワヂシャはカワヂシャと同様に、流れが緩やかな河川や水路際に生育しやすい種ですが、近年の集中豪雨による河川の出水などによって、個体もしくは、生育していた場所そのものが流されてしまったなどの可能性があります。ただし、減少は一時的であることも想定されることから、カワヂシャとともに、生育状況の変化を把握していくことが大切です。

タイコウチは、第2回調査から対象種として調査しており、第2・3回調査では、市内の平野部などでみられていましたが、今回調査では、穂高地域及び三郷地域のそれぞれ1地点ずつの情報のみとなり、確認地点数が大きく減少しています。水田や池沼など、流れがない場所や、流れの緩やかな河川などを好む生きものですが、水田から畑への転作などによって生息環境が減少している可能性があり、長野県や市のレッドリストでは、準絶滅危惧種に指定されています。



淡い紫色の花が咲くオオカワヂシャ



岸際にオオカワヂシャの繁茂がみられた水路
(2018年4月13日撮影(明科地域))



今回調査ではオオカワヂシャの減少を確認
(2023年4月22日撮影(明科地域))

また、昆虫採集で親しまれてきたトノサマバッタは、第1回から調査を行っており、当初は市内の多くの場所で生息が確認されていましたが、今回調査では、豊科地域及び明科地域の1地点ずつの情報となり、確認メッシュ数は、第1回調査の約1/10です。トノサマバッタは草地環境を好む生きものですが、生息に適した草地が減少している可能性があります。



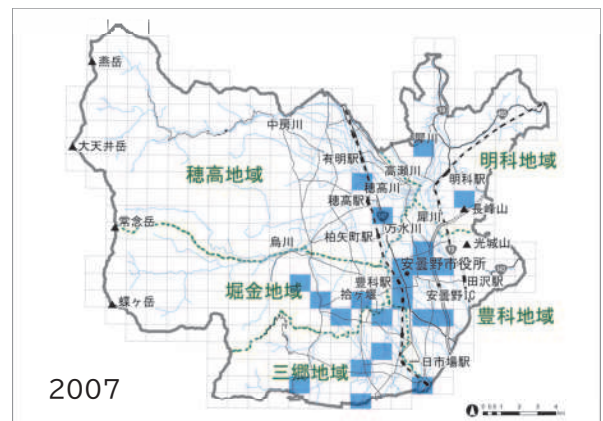
2021年に堀金地域で捕獲されたタイコウチ



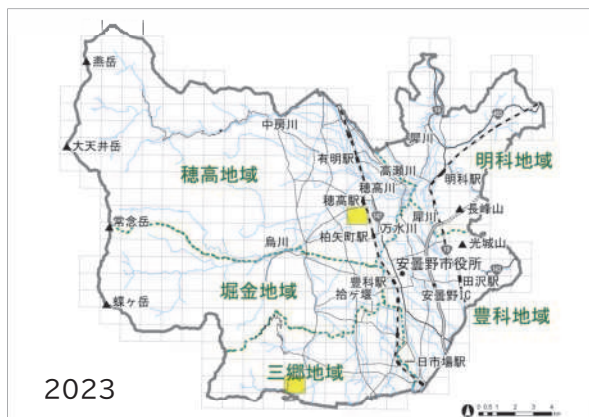
トノサマバッタのオスとメス



2012

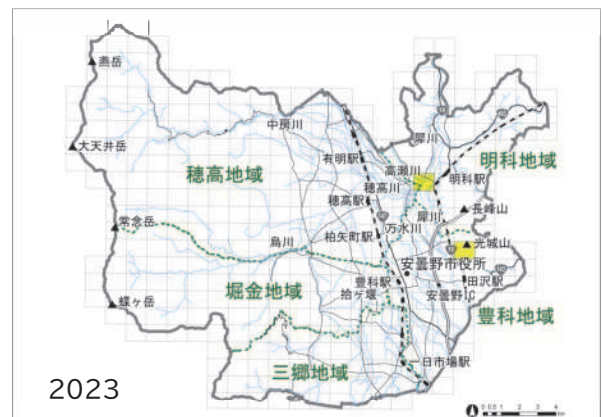


2007



2023

タイコウチの変化 (2012と2023の比較)



2023

トノサマバッタの変化 (2007と2023の比較)

アブラコウモリは、トノサマバツタ同様に第1回から調査を行っており、第3回調査までは生息状況に大きな変化はなかったものの、今回調査で確認地点数が大きく減少しました。

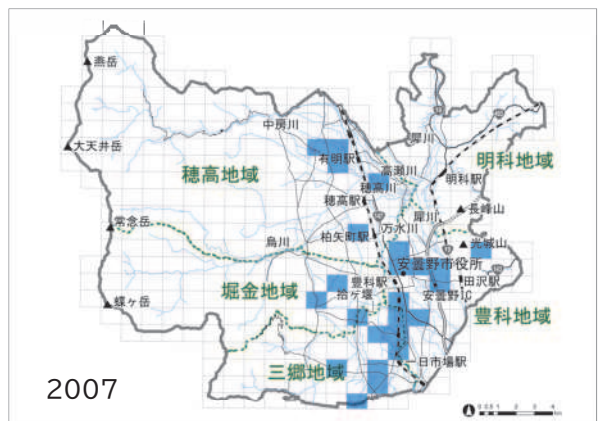
アブラコウモリは、主に、人家の屋根やサッシ、橋桁など人間が造った建物や構造物の隙間に営巣していることから、別名イエコウモリとも呼ばれており、糞などによる衛生面での被害も発生しています。

日中に休息している姿を見ることは難しく、また夜間に高速で飛翔することで種の同定がしづらいため、調査参加者の変化によって報告数が変動した可能性があります。しかし近年、地球温暖化に伴う気候変動の影響で、餌となる昆虫類の数が減少していることから、アブラコウモリの生息数に変化が生じている可能性も考えられます。

経年的な減少傾向が確認された生きものの多くは、私たち人間の生活の変容による影響を受けている可能性があることから、今後の変化を把握していくとともに、市内のさまざまな自然環境を守っていくことも大切です。



被膜を広げたアブラコウモリ



アブラコウモリの変化 (2007 と 2023 の比較)

